

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

田島準子のこと

加藤 禎 行 (センター研究員)

田島準子の名前を最初にご教示下さったのは、福田百合子さんだった。2006年1月、本学に中本たか子宛横光利一書簡が寄贈され、角島出身のプロレタリア文学作家中本たか子についての調査を始めた。この調査は、2010年10月に、山口県立山口図書館内のふるさと山口文学ギャラリーでの小展示「中本たか子の文学世界」で、一応の結実となったのだが、その頃、福田先生が「田島準子の『青雲』という小説には、上京する中本たか子を小郡駅で見送る田島準子が出て来ますよ」とおっしゃったことが、ずっと気に掛かっていた。

2011年頃、やまぐち文学回廊構想推進協議会が発行する『やまぐちの文学者たち』の増補版が編集されることになり、何人かの文学者を追加選定する機会があった。何人かの顕彰するべき作家たちの名前のなかに、筆者は田島準子を挙げた。いきおい田島準子の履歴を調査する担当者となったが、とにかく彼女の履歴の詳細が判らない。さまざまな雑誌総目次を参照し、暫定的な著述の履歴を作成する。刊行された単行本を年代順に並べる。こうした作業を繰り返しても、昭和戦前期の新進女流作家だった田島準子は、戦後、児童文学者として持続的な執筆活動を続けた、といったことしか書けないのだ。

田島準子の最後の著作として自費出版された『風雪の道』（昭和55年）の刊記にあった「芳流文庫」という堂号が気になり、試しに出版元として図書検索してみると、井上芳佐の自費出版物が山口県立山口図書館の蔵書として見出された。しだいに陸軍中将だった井上芳佐が田島準子の結婚相手であり、山口市維新公園近くにある古民家「芳流庵」が井上芳佐旧居で、「芳流文庫」はそこに置かれた私設図書館だったことが判ってくる。そこでセンター研究員の安光裕子さんに相談したところ、地域の縁を生かして吉敷の町会や不動産屋に掛け合い、元の持ち主の居所を探し出してくださった。その御蔭で、ご遺族星野由久子氏のご連絡先も判り、田島準子の没年月日など年譜の重要な情報を得ることができた。星野氏から写真の提供も受け、このようにして増補版『やまぐちの文学者たち』は、2013年2月に完成した。

この増補版『やまぐちの文学者たち』の刊行を承けて、2016年9月、ふるさと山口文学ギャラリーは顕彰活動の一環として、「あの頃の少年・少女たちへ ～ 大正・昭和前期の児童文学とふるさと文学者たち～」を企画し、吉屋信子、元島英三、氏原大作と並んで、田島準子の著作もギャラリーに並ぶこととなった。筆者はこの展示と関連して、9月17日、山口図書館第2研修室で、「田島準子



▲ 田島準子肖像 (星野由久子氏より提供)

が描いた〈やまぐち〉——小説『青雲』を読んで」という小講座を行っている。『青雲』（1940年12月、六藝社）は、田島準子の第一単行本で、朝日新聞創刊五十年記念懸賞佳作となった小説だ。芸術家を目指す女主人公が、みずからの芸術の道に苦悩しながら前進を続けるという自伝的小説で、Y町の図書館の閲覧室での場面も描かれていた。山口という町、その町の歴史ある図書館、そして田島準子の来歴とが、講義の途中でしばし重なり、深い感銘を受けたことを記憶している。

阿東の作家「氏原大作」の顕彰活動に 取り組む

伊藤 繁 樹（氏原大作顕彰会）

築100年を過ぎる氏原大作（本名 原 阜）生家の現状と行く末を案じこのままでは生家も氏原大作も人々の記憶から忘れ去られていくような寂しさがあり、年月の歩みに背中を押されながら地元の住民として氏原大作の顕彰活動を地域の活性化とともに取り組むことにしました。

顕彰活動の実行委員として集まっていたのは、親族から杉山章夫氏、郷土史家の河村明英氏、地域づくりから梅田 進氏、映像作家の大野進二氏、地元市議の原 真也氏です。

氏原大作平成顕彰会が発足した昨年は、氏原大作没後60年の節目でもあり、まだ氏原大作のおもかげ・思い出を語れる人が阿東に点在しておられる。その話をぜひ聞きたいという思いで「氏原大作を語る会」を計画し、生家で2回地福と徳佐で1回ずつ計4回開催しました。

各回の参加者は30名程、内容はまず郷土史家の河村明英氏の語りから始め、大野進二氏作成のビデオを鑑賞し後半は参加者全員 車座になって氏原大作に関する思い出などを語り合うという形式をとりました、それは実際に氏原大作に接された時の話などで、リアリティがあり当時を彷彿とさせるものでした、「氏原大作を語る会」には数回にわたり参加される方もいて、その様子は大野氏によって映像記録されています。



▲ 『幼き者の旗』

氏原大作の業績を語る上で驚くことの一つは2つの作品が当時のトップスター澤村貞子や笠智衆等々が演じた映画になったという事です、あの時代の風潮という追い風もあったと思いますが地方作家の作品がマスメディアの充分ではない時代に取り上げられ一世を風靡した事実は忘れてはならない特筆に値するものだと思います。

顕彰会ではその映画の上映に向け「氏原大作を語る会」と同時進行で市議の原 真也氏に動いていただき、東京の国立近代美術館に保管されていた「幼き者の旗」を多くの方々のご尽力により昨年末YCAMで上映する事が出来ました。観客には氏原大作ご親族の方々、語る会に出席された方々をお迎えし、氏原大作没後60周年の節目にする事が出来ました。

今年実行委員会は生家で「氏原大作の写真・資料展」を開催することを目標にしてご親族や親交のあった方々にお手紙を差し上げ呼び掛けています。

氏原大作平成顕彰会では今、個人のお宅にある写真や資料を集めておくことは今後に活かすため最も重要なことだと思っています、氏原大作文学作品の紹介は元よりその生涯 生きざまや生活の温もりまで伝えていけるような顕彰活動が出来るように努力してまいります。



文学がもたらした出会い

吉川 香苗 (前山口県文化振興課)

「文学は人を救うものである」—文化振興課での2年間は、文学部在学中に恩師にいただいたこの言葉を実感した日々でした。特に、やまぐち文学回廊構想推進協議会の事務局として、多くの出会いに恵まれたことは、私にとっての財産になりました。文学者の研究を第一線でやってこられた先生方、文学者の遺族の方々、講座を通じて出会った県民の皆様。また、多方面でサポートしてくださった山口県立大学郷土文学資料センターと山口県立山口図書館の方々との触れ合いは、私の母校であるだけにありがたいことでした。文学が繋いでくれたこうしたご縁は、これからの私を励まし、支えてくれることだと思っています。

この日々で学んだことは、文学は人の思いによって受け継がれていくものだという事でした。作品を残した文学者の思いは、文学者を支える家族や文学者を愛した人たちによって受け継がれてきたおかげで、こうして時代を経ても色あせることなくその思いを感じることができるのです。人の思いが文学を蘇らせ、文学が人と人とを繋いでいく、そう強く思いました。

この2年間で新たに取り組んだことの一つに、「文学回廊だより」の発行があります。文学回廊構想の情報発信の一つとして取り組んでいる文学おでかけ講座や文学散歩、山口県立山口図書館のふるさと山口文学ギャラリーの関連事業である文学講座など、事業内容・講話概要をまとめてご紹介しているものです。それぞれの講座での講師のお話は、本当に心を奮わせる新しい発見や驚き、感動に満ちたものばかりでした。自分が生まれ育った地に、こんなにも魅力的な文学者が息づいていたことを嬉しくも誇らしくも思えたものです。このたよりを通じて、参加された以外の方々にも山口の文学者について改めて興味を持っていただき、ふるさとへの思いが深く愛情豊かなものになる契機にしてもらえたらと思っています。

来年の平成30年は、明治150年という記念の年です。そこに向けて、明治、大正、昭和、平成と時代をまたがって活躍してきた山口の文学者を改めて再顕彰するよう、「やまぐちの文学者たち」の追加選考を始めることとなっています。身近な生活圏内にひたむきに生きた文学者たちが存在していたことを県民の皆様にご存知いただくことは、ふるさとを見直し、それを誇りとする心を育むことに繋っていくのだと思います。文学によって人と人とが一層結びつき、それが人や郷土を潤し救うものになっていくことを願ってやみません。



▲ 『やまぐち文学回廊だより』第1号 (2016年3月発行)



▲ 『やまぐち文学回廊だより』第2号 (2017年3月発行)

寄贈図書 (2017年2月～2017年7月)

毎日新聞山口支局『はがき随筆』第13～21集、柿村きよ美『句集「たらちねに」』、樋口かずみ『歌集 風鈴草』

寄贈雑誌 (2017年2月～2017年7月)

『其桃』第866～872号(其桃発行所)、『あらつち』第709～711号(あらつち社)、『嘉村磯多顕彰会だより』第1～8号合本(嘉村磯多顕彰会)、『颯』第104～105号(颯文学会)、『山彦』第138～140号(山彦発行所)、『文芸山口』第332～334号(山口県文芸懇話会)、『和海藻』第32号(豊北郷土文化友の会)、『中原中也記念館館報』第22号(中原中也記念館)、『佐波の里』第45号(防府史談会)、『大内文化探訪』第35号(大内文化探訪会)、『秋芳町地方文化研究』第52～53号(秋芳町地方文化研究会)、『火山群』第55号(岩国文学協会)、『大妻女子大学 草稿・テキスト研究所 研究所年報』第10号(大妻女子大学 草稿・テキスト研究所)



郷土文学資料センター設立 30 周年記念 行事について

稲田 秀雄 (センター長)

昨年度は、当センターの設立 30 周年記念行事として下記の催しを実施しました。

- 「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展 (於山口県立山口図書館ふるさと山口文学ギャラリー) 平成 29 年 1 月 10 日～4 月 27 日
- シンポジウム「郷土文学資料センターの今までとこれから」(於山口県立山口図書館第 1 研修室) 平成 29 年 3 月 18 日

展示については、前号 (28 号) に紹介記事がありますので、詳細は略し、無事終了したことをご報告いたします。3 月 18 日のシンポジウムは、13 時より、福田百合子氏「山口県の文学と郷土文学資料センター」、熊本守雄氏「山口県内の文学資料調査」、稲田「法人化以降の活動とこれから」の 3 つの講演と全体討議、同時開催の「センターの歩み」展での講演者を中心とするギャラリートークが行われ、約 50 名の参加がありました。いずれの催しも県立山口図書館ならびに、やまぐち文学回廊構想推進協議会の全面的なご協力とご支援を得て、好評のうちに終えることができました。関係各位及び参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。



▲ 福田百合子氏



▲ 熊本守雄氏



▲ 稲田秀雄センター長

編集後記

▼今号は、加藤禎行センター研究員に「田島準子のこと」、氏原大作顕彰会の伊藤繁樹氏に「氏原大作顕彰会の活動」、さらには、前山口県文化振興課の吉川香苗氏に『文学回廊だより』の発行について執筆していただいた。
▼田島準子は、中原中也や金子みすゞ、種田山頭火などに加えて、増補版の『やまぐちの文学者たち』(やまぐち文学回廊構想推進協議会、平成 25 年)において、新たに紹介された一人である。6 年前には、ご遺族の星野由久子様とは、全く面識がないにも関わらず、図々しく何度もお電話を差し上げ、田島準子に関する様々な情報をいただき、貴重なお写真をお借りするまで親しくさせていただいた。ただただ感謝申し上げる次第である。『やまぐちの文学者たち』が上梓後、星野様よりお手紙をいただいたときは、地縁を痛感した瞬間であったことを思い出し、懐かしい。
▼発行が遅れに遅れてしまった。これはひとえにわたくしの不手際によるものである。次号は、スピード感を持って編集にあたる所存である。(安光)



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2017 (平成 29) 年 10 月 31 日